原 著

0 歳難聴児におけることばの基盤の形成と自発的言語獲得

——ことばの発見と他者理解における対人的循環反応の意義——

野中 信之¹⁾ 越智 啓子²⁾ 大森千代美²⁾ 高橋 伴子²⁾
池内 香²⁾ 酒井 俊一²⁾ 福田信二郎³⁾ 森 望³⁾

要 約: 難聴乳児 1 例をビデオで観察し、症例がその気持ちを察してもらいながらあやされた結果、生後 7 ヶ月過ぎから自発的に養育者との関係をつくり、その関係をさまざまに試す(対人的循環反応)なかで、ことばの基盤を形成し始め、生後 11 ヶ月頃、初期のことばを発見する過程を示した。

養育者との対人的循環反応における関わりから、症例は「待つ」という期待感を込めた行動や、動作と視線と声を組み合わせた表現方法を派生させ、やがてことばを使うにいたった。

本症例の自発的な言語の獲得では出生後よくあやされ、積み木を倒すなどで自発的に養育者との関係をつくろうとすることが重要であったと考えられた。

索引用語: 0 歳難聴児, 早期教育, ことばの基盤, 自発的言語獲得, 対人的循環反応

Formation of Language Foundation and Voluntary Language Acquisition in a Crawler with Hearing Loss

——Interpersonal Circular Reaction of a Baby and its Contribution to the Discovery of Early Words and Understanding of the Mind of Others——

Nobuyuki Nonaka¹⁾, Keiko Ochi²⁾, Chiyomi Ohmori²⁾, Tomoko Takahashi²⁾,
Kaori Ikeuchi²⁾, Shun-Ichi Sakai²⁾, Shinjiro Fukuda³⁾ and Nozomu Mori³⁾

Abstract: A well-cradled crawler with hearing loss was observed by video during the latter half of his first year, i.e. from seven months until his first birthday. From the eighth month after birth, the video showed that the baby began to establish a relationship with his caregiver and tested that relationship repeatedly in what we call an “interpersonal circular reaction,” thereby setting the foundation on which to acquire language.

Around eleven months after birth, the baby discovered some early words within the

四国中央医療福祉総合学院¹⁾: 〒799-0422 愛媛県四国中央市中之庄町 1684 番 10

難聴幼児通園施設香川こだま学園²⁾: 〒760-0080 香川県高松市木太町 3 区 1997 番地 3

香川大学医学部耳鼻咽喉科学講座³⁾: 〒761-0793 香川県木田郡三木町大字池戸 1750-1

¹⁾Shikoku-Chuo Medical and Welfare General College: 1684-10, Nakanosho-cho, Shikoku-Chuo-shi, Ehime 799-0422

²⁾Kagawa Kodama Gakuen Day Care Center for Children with Impaired Hearing: 1997-3 3 ku, Kita-cho, Takamatsu-shi, Kagawa 760-0080

³⁾Department of Otorhinolaryngology, Kagawa University Faculty of Medicine: 1750-1 Ikenobe, Miki-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0793

2007 年 5 月 23 日受付 2007 年 7 月 5 日受理

context of the interpersonal circular reaction with his caregiver, in a phase we refer to as “voluntary language acquisition.”

The interpersonal circular reaction with his caregiver led the infant to acquire some primitive actions, e.g. “waiting.” This next developed to expressive means combining gestures, eye contact and voice, which then led to the use of words.

We concluded that the well-cradled infant in his paper developed the relationship with his caregiver voluntarily, through which he came to understand the mind of others and discovered his early words in a process we call “voluntary language acquisition.”

Key words: crawler with hearing loss, early intervention, language foundation, voluntary language acquisition, interpersonal circular reaction

はじめに

難聴児の早期教育は母子の相互交渉に基づくべきとする報告は多いが、その実態を明示し、0歳難聴児の教育的臨床的行為に具体的な指針を提供しようとする研究はまれである。

著者は難聴児に限らず、言語発達障害児においても、言語獲得に困難を示す症例には、ことばの基盤を育てるという考えを導入すべきと主張してきた¹⁻⁷⁾。

近年、新生児聴覚スクリーニング検査による0歳難聴児への教育的関わりが可能となり、また人工内耳の早期装用も定着しつつある。これらは一見難聴児の教育に好条件がそろいつつあるかの感がある。しかし人工内耳を装用しても、効を奏さない症例もあり、かつ症例は依然として難聴であることに変わりはない。すなわち人工内耳装用児といえども安易な対応は許されない。また重複障害など人工内耳の適応とはならない症例のなかに言語獲得に困難を示す場合が少なくない。

著者はこれら困難を解決する鍵は早期に発見された難聴児がことばの基盤を良好に形成するよう援助することにあると考えている。

ことばの基盤という発想を解説する文献は発達障害児への対応を中心に近年増えている。しかし、その基盤が未形成な症例に対する養育者（母親と指導者）の臨床的対応法と、その基盤が形成される機制は解明されているとはいいいにくい。これらが早期かつ具体的に解明されないかぎり、新生児聴覚スクリーニングで発見された難聴児への教育的対応はさらに困難に陥るといわざるをえない。

本研究の目的は、0歳難聴児の教育指針を得る一助として、著者がこれまで報告してきた幼児症例^{2,4)}ではなく、0歳の難聴児がことばの基盤を形成し、自発的に言語を獲得する際の、症例と養育者との相互交渉の

実態をまず観察事実として示すことにある。次にそれがいかに子どもの言語獲得に関与するか、その機序を明示することである。

症 例

症例は生後5ヵ月で香川大学医学部附属病院耳鼻咽喉科にて高度難聴（図1）と診断された男児である。本症例は香川こだま学園で補聴器を装用し、養育者との関わりのなかで自発的にことばを獲得するよう配慮した教育（自発的言語獲得援助法）を開始した。

母親は平素、本児の気持ちを察しながらあやし、また本児が物をやたら口に入れるなどのときは常識的に止めるなどを心掛けていた。

1歳1ヵ月時の新版K式発達検査の発達指数は認知・適応106、言語・社会86であった。

現在は某国立大学に在籍し、学業成績は良好である。

図1 症例の1歳6ヵ月時のオージオグラム（COR）

▲は補聴器装用時

方 法

0歳7ヵ月～0歳11ヵ月にかけて、家庭訪問時に撮影されたビデオテープを次のように検討した。

まずビデオを再生し、本児と養育者との相互交渉に関連すると判断された本児の行動のすべてを記述した。その記述事項を基に以下の①～④の出現頻度を示し、それぞれの関連を考察した。

①子どもが自分の世界と養育者の世界との関係に気づいたことを示す資料として、ひとり笑いか、相手に向けた笑いかを示す「笑いの状態」の変化。

②子どもが養育者と関わりをもつために使った手段、すなわち対人的循環反応^{1,3,4)}、参照視^{8,9)}、共感¹⁰⁾、ことばや身振りなどの理解、要求の表出などである。これら項目の定義は次に、また具体例は後述する。

子ども自身が何らかの行為をした後に養育者を見上げた場合を対人的循環反応と、何らかの出来事に伴い養育者を見上げた場合を参照視とした。しかし、対人的循環反応と分類されたものには対人的な興味が少ないため、対人的循環反応としての意味が弱いと判断されたものがある。それらは「対人的循環反応（弱い）」と分類した。同様に形式上は対人的循環反応の形をとっても、ビデオ画面の前後関係や表情からは「共感」や「要求の表出」と判断されたものもある。それらはそれぞれ「共感」「表出」として分類した。

③子どもが「表出した手段」の内訳

④子どもがことばなどを「理解した手段」の内訳

観 察 結 果

観察1：0歳7ヵ月、本児は本を口にくわえる。指導者は「アア、アウアウアウ」と言いながらその本を取る。しかし本児は本ばかり目で追い、指導者の顔を見ることはない。

観察2：0歳7ヵ月、本児は積み木を口に入れる。その積み木を母親が「お口はダメだよ、ダメダメ」と取り出す。すると本児は母親のほうは見ることなく、泣き始める。

観察3：0歳7ヵ月、鏡をのぞきこむ。指導者ものぞくと、鏡に映った指導者の顔に興味を示し、自分の口を開閉する。指導者も真似て「ばばばば」と言い口を開閉する。するとその関係に興味を示したようで、本児は鏡ごしに口の開閉を繰り返す。指導者も「ばばばば」と反応を返すと、その反応を見る。

観察4：0歳8ヵ月、母親が積み木を積むと、本児はそれを倒す。母親が「あー倒れちゃった」と本児の

写真1 観察4：0歳8ヵ月、母親が積んだ積み木を倒しては母親の顔を見る。

頭上から言うと(写真1上)、本児にその声が聴こえたようで、母親の顔を見上げる(写真1下)。母親も本児の目線に応じ、「アラー倒れちゃったねー」と笑顔で再び言う。

母親が再度積み木を積むと本児はまた手を伸ばして倒す。母親が「アラー倒れちゃった」と笑顔で応え、本児も母親の顔を見上げ、このようなやりとりが続く。同じことを繰り返すうちに、本児は積み木を倒すと、母親の声を聴く前にただちに母親の顔を見上げるようになる。

観察5：0歳8ヵ月、本児に積み木を倒させようと、母親は積み木の箱の上に積み木を積む。しかし積み木は本児が倒す前にバランスを失って倒れ、積み木箱の上から転がり落ちる。すると本児は自分が倒したわけではないのに転がり落ちた積み木を見て、母親の顔を見上げる。

観察6：0歳8ヵ月、母親は積み木をテーブルの上に積み、本児はそれを手で倒す。

するとその積み木はテーブルから床に転がり落ちる。本児はそれを見て、驚いたような表情で母親を見

写真2 観察6：0歳8ヵ月，積み木が床に落ち，驚いて母親の表情を読み取る。

写真3 観察7：0歳8ヵ月，窓ガラスを叩き，母親の連打を待つ。

る(写真2左)。母親が「倒れた！」と笑うと，本児はその表情を見て，次に自分も笑う(写真2右)。

観察7：0歳8ヵ月，本児は窓ガラスを叩いている。本児が1回叩くと，母親が「とんとんとんとん」と叩き返す。すると本児はガラスに手を当て，母親の連打を感じているようである(写真3上)。

続いて本児は再度ガラスを叩き，その後，母親の連打を待つようにガラスに手を当てる。母親は本児が「待

写真4 観察8：0歳10ヵ月，母親の顔を見ながら積み木を下に落とす。

写真5 観察9：0歳10ヵ月，アイロン台を引き，母親を見上げ，声を出す。「出して」と表現。

っている」のではないかとその気持ちを察し，連打を返す。すると本児もその関係に気づいたようで，以後ガラスに手を当てては母親が連打するまで待つ(写真3下)。

観察8：0歳10ヵ月，本児はテーブルに上がり，積み木で遊ぶ。テーブルの縁で手に積み木を持ち，母親の顔を見上げる。そして母親の顔を見たまま積み木をテーブルから下に落とす(写真4)。母親が「あらー落ちちゃった」と笑いながら驚いた表情をする。すると本児は母親の顔を見上げたまま再び積み木を下に落とし，再度母親に「落ちちゃったねー」と言わせる。数回同じことを繰り返す。

観察9：0歳10ヵ月，本児は立て掛けてあったアイロン台に興味を示す。本児はその台を引き，母親が止めに来はしないかという表情で母親の顔を見る。

写真6 観察11：0歳10ヵ月、電灯の点滅を繰り返し、母親を見て笑う。

母親が止めないでいると、再びその台を引き「エアー」と言い、母親を見る(写真5)。母親も本児の意図を察し、「これで遊ぶの?」と応じる。

観察10：0歳10ヵ月、本児は積み木を口に入れ母親を見上げる。母親は自分の手に持った積み木を、本児の口の積み木に「かちかちかち」と言いながら打ち付ける。本児は母親を見続ける。これを繰り返すうちに母親は自分の積み木を「はいどうぞ」と本児に差し出す。本児はそれを受け取り、その積み木を構え、母親の顔を見て待つ。母親が身振りを使わず「かちかちかち」と言い始めると、それに呼応して本児は手の積み木を自分の口の積み木に打ち付ける。

観察11：0歳10ヵ月、この頃本児は電灯の紐を引き、点滅ができるようになっていた。

本児は母親に抱かれ電灯の紐を引く(写真6左)。電灯をつけては母親の顔を見て、消しては母親の顔を見る。そのたびに、母親が身振りとともに「ぴかぴか」と言うと言つて母親の顔を見ては笑う(写真6右)。

観察12：0歳11ヵ月、ビデオ撮影中にカメラの正面に装着してある充電警告ランプが点滅し始め、本児はそのランプに見入る。

指導者が身振りとともに「ぴかぴかしてる」と言うと言つと、本児は指導者に目を向ける。指導者が再度ゆっくり「ぴかぴか」と言う(身振りを使用したかは不明)と言つと、本児はしばらく指導者を見て考えるような表情を示し、今度は天井の電灯を見上げる。

観察13：0歳11ヵ月、前の月から本児は座布団の上に乗り、母親に揺らしてもらって遊びをしていた。その頃から母親が座布団を示し「ゆらゆらしよう」と誘うと言つと、上に乗るようになっていた。

本児はこの日、ビデオ撮影中の指導者と遊びたいと思ったようで、母親に支えられて指導者に歩み寄る。指導者を見上げて「ウアウア(ゆらゆら)」と言いつ、「エー(ねー)」と小首をかしげた。続いて、普段揺らして

図2 「笑いの状態」の変化

図3 「養育者と関わりをもつために使った手段」の変化

もらっている座布団に乗り、「アアア (ゆらゆら)」と言いつ上体を揺らし、母親を見上げる。

観察14：0歳11ヵ月、母親を見ながらアームバンドを口に入れる。

母親が「あっ! だめ! マンマと違うね」と止める。すると本児は母親の反応に興味をもち、次は指導者に視線を移し、指導者を見たままその反応を試すようにアームバンドを口に入れる。指導者が「マンマと違う」と言つと、目を見開いて指導者をじっと見て笑い、再度母親を見て抱っこを求める。

以上の経過を通じて本児が自分の世界と養育者の世界との関係をどのように分化し、認知するようになったかを知るため、子どもの「笑いの状態」の変化を示した(図2)。0歳8ヵ月までは「ひとり笑い」の割合が多かったが、生後10ヵ月以降は減少し、逆に「相手に向かって笑う」が増加した。

次に、本児が「養育者と関わりをもつために使った

図4 「理解した手段」の内訳の変化

図5 「表出した手段」の内訳の変化

手段」の変化を図示した(図3)。図において養育者と関わった手段として「対人的循環反応(観察3, 4, 7, 14)」,「参照視(観察5, 6)」,「共感(観察11)」が大部分を占め,「理解(観察10, 12)」と「表出(観察13)」が増加傾向を示した。

本児が「理解した手段」の内訳(図4)は,生後8ヵ月で「ことばと身振りや仕草の理解」が出現し,それは生後10ヵ月以降急増した(観察12, 13)。同時に「ことばの理解(観察10)」も出現した。

また本症例の「表出した手段」(図5)は,当初「泣く」という感情表出だけであったが(観察2),その後「泣く」は減少し,代わって「待つ(観察7)」が加わった。「待つ」ことは生後8~10ヵ月にかけて急増し,その後減少している。

一方,生後8ヵ月以降,「動作と視線」を組み合わせた方法,「動作と視線と声(観察9)」を組み合わせた方法などがそれぞれ増加傾向を見せながら加わり,やがてことばの使用(観察13)へといたった。

図6 能動的に声やことばを引き出したと思われる回数

ひとたびことばを発見すると,本児は対人的循環反応のなかで能動的に声やことばを引き出し,その機能を試していった(観察14,図6)。

考 察

難聴児の早期教育について Musselman ら¹¹⁾はその成果を左右する要因として,母子コミュニケーション,教育開始年齢,親が主体となって教育に当たるか否かなどを挙げ, Yoshinaga-Itano ら¹²⁾は乳児難聴における言語獲得では動作的な相互交渉の重要性を強調した。MacTurk ら¹³⁾も重度難聴児の社会的言語的発達には母子の視線や情緒による交流,応答的な関わりが重要と述べ,また Brown ら¹⁴⁾は両親こそが子どもをよく知り,その発達を促進する人物であり,家庭を中心とした親子の相互交渉を基に難聴児の早期教育は展開されるべきとした。

このように0歳難聴児の教育では母親による家庭教育がその主体であり,母子の応答的相互交渉が難聴児の言語獲得の基盤である点に諸家の意見の一致をみる。しかしこれら研究者のいずれもが難聴児の母子の相互交渉が具体的にいかなるものか,かつそれがいかにして難聴児の言語獲得を可能とするかには言及していない。それ故養育者が難聴児とどうかかわればどのようにことばが獲得されるかは不明確なままである。

一方中村¹⁵⁾は難聴乳児と養育者との相互交渉を具体的に記述し,養育者の役割として,子どもに相互交渉への感受性を高めることを挙げ,その結果,子どもは能動的に場面を展開し,言語獲得に移行すると述べている。

本研究では0歳難聴児が,積み木を倒すなどで自分と母親との関係を自発的につくり,かつその関係を試すために母親を見上げる行動(対人的循環反応)によ

り、ことばの基盤を形成し、そこから前言語的な意思疎通行動を派生させ、やがて言語を発見する過程における子どもの能動性を示した。

対人的循環反応には子どもが養育者の反応を確かめるために養育者に向ける目線（参照視）が含まれる¹⁾。著者はその参照視は対人的循環反応に端を発することをすでに報告している¹⁾。なお参照視は対人的循環反応だけでなく、さまざまな出来事に伴い子どもが養育者の顔を見る行動でもある⁸⁾。養育者がこの参照視を手掛かりに接していけば、難聴児はやがて読話の能力を獲得することも著者はすでに報告している⁴⁾。

子どもがことばを獲得する基盤として一般には共同注意（別府⁸⁾、Bruner¹⁶⁾）、共感共有関係（金山ら¹⁰⁾）、三項関係（やまだ¹⁷⁾）などの表現が用いられており、これらは子どもの同一の発達状態をそれぞれ異なる視点から見たものであり、ほぼ同義と考えてよい。著者はそれを「ことばの基盤」と表現し、その意味を子どもが自分自身と養育者との関係に気づくことと定義してきた。その理由は次のとおりである。

すなわち気持ちを察してもらいながらあやされた子どもは、対人的循環反応において自分自身の行為と、それに対する養育者の反応との関係に気づき、その関係をさまざまにかつ能動的に試すようになる。その結果、中島¹⁸⁾が述べているように自分自身の世界に対する認知（動作的認知）と養育者の世界に対する認知（情動的認知）とを発達させ、両者の世界の関係がわかるようになる。こうなると子どもは養育者など他者を理解するようになると同時に、初期言語の獲得にいたると考えられるからである。

中島¹⁸⁾によれば子どもに両者の世界の関係がわかるようになると、養育者が使うことばが自分の世界のどのことを表現しているかがわかるようになり、やがて子どもはそのことばを使って、自分と養育者との楽しい関わりの世界を養育者に向かって表現するようになるという。それはラベリング²⁰⁾などとは異なる機能である点は強調されるべきである。

このように対人的循環反応や他者理解、初期言語の獲得には、子どもが自分の世界と養育者の世界の関係に気づき、両者の関係がわかるようになることが一貫して重要と考えられた。そのため著者はその一貫性を明確にし、言語獲得との関係を平易に表すため「ことばの基盤」という表現を用い、それを上記のとおり定義した。

ことばの基盤の形成と自発的言語獲得のためには養育者は子どもの気持ちを察しながらかわり、養育者

と子どもとの間に情緒的に楽しい交流が育ち、子どもが自分自身と養育者との関係に興味をもつことが必要である^{1,2,4,6)}。ことばの基盤は通常は0歳代後半に形成されるが^{1,2,4)}、難聴児は難聴ゆえにその出現は遅れがちとなる¹⁾。しかしたとえ重度難聴でも乳児期の養育者との関わりが良好であれば、その出現と言語発達の遅滞は少なくなる²⁻⁴⁾。

さらに著者は、それらに遅れを伴った症例に対して、幼児期と遅れてはいたが養育者との間に情緒的交流を育てた経過を3例報告した^{1,2,7)}。結果は3例とも対人的循環反応の出現とともにことばの発見と言語獲得にいたっている。

この3例は当初は養育者との関わりや視線が合うことが少なく、うち1例²⁾は多動の傾向も認められた。しかしこれら問題点は、いずれもことばの基盤の形成過程で改善している。なお同様の結果は難聴や知的障害を伴わない言語発達遅滞児71例でも得られている⁶⁾。

本研究で観察した乳児も療育開始当初は養育者のほうに顔を向けることは少なく（観察1，2）、自分自身と養育者との関係に気づいているとはいいいにくかった。またその頃の要求の表出として「泣く」ことがほとんどであった（観察2，図5）。

しかしたとえば指導者と鏡を使って遊ぶなどするうち対人的循環反応が始まり（観察3，図3）、その後、0歳8ヵ月で積み木を倒しては母親との関係を自発的につくり、同時に、その関係、すなわちことばや表情を含めた母親の反応のすべてを確かめるように、その顔を見上げる（対人的循環反応；観察4）ようになった。同様に自分が関与せず、偶然起こった出来事にも母親の顔を見上げ（参照視；観察5）、かつ、母親の表情やことばからその情動を読み取るようにもなった（Emdeの母親参照⁹⁾；観察6）。

なお、対人的循環反応で、積み木を押すとそれが倒れることがわかることは中島のいう動作的認知の発達であり、積み木を倒しては母親を見上げ、そのときの反応や情動を読み取り、その気持ちがわかるようになることは、同じく情動的認知の発達である。このように出生後よくあやされた本症例は対人的循環反応や参照視において動作的認知と情動的認知を同時並行して発達させ、ことばの基盤を形成したと考えられる。

本症例の対人的循環反応には発達の変化が見られた。生後7ヵ月頃では、症例の行為に対して養育者が何らかの反応を示した後に、子どもは初めてその関係に気づいていた（観察3，4）。それが、生後10ヵ月

頃ではあらかじめ養育者の顔を見ながら働きかけている(観察8)。これは本児が養育者の反応への興味を強め、予期するようになった証拠である。

その後、本児は共感共有(観察11)、ことばの理解(観察10, 12)、自発的な言語の獲得(観察13)へといたっている(図4, 5)。

以上と並行して、観察7のように本症例は窓ガラスを叩く対人的循環反応としての関わりで母親の働きかけを「待つ」ようになった⁴⁾。すなわち母親は「待つ」ている本児の様子を見てその「続けたい」と思う気持ちを推察し、ガラスを叩き返した。この対応で、子どもは「待て」ば、「してほしい」という自分の気持ちを察してもらえることがわかるようになったと考えられる。

この「待つ」ことは、対人的循環反応における相互交渉では、母親に気持ちを察してもらう手段として有効である。しかしそれはその後の本児の要求の広がりには対応できない。そのため「待つ」という手段は対人的循環反応期に限られた一過性の表現手段であり、やがて「動作と視線」を用いた警戒(観察9)や「動作と視線と声(観察9)」などの表現手段、さらには「ことば」に置き換えられていったと考えられた(観察13, 図5)。

本児の笑いの状態の検討結果では生後10ヵ月以降、ひとり笑いが減り、養育者に向かって笑顔を向ける割合が増えている(図2)。この頃の観察事実として、たとえば電灯をつけては笑って母親の顔を見るようになっている(観察11)。これは形式上は対人的循環反応である。しかしもはや対人的循環反応としての「母親との関係への興味」ではなく、共感的行動としての意味が強い。同様に観察9では警戒や要求の表出としての意味をもつ。

これらはそれまでの対人的循環反応や参照視により、自分が楽しいと感じ、また触ると叱られると感じるときは母親も同様に感じ、自分が「してほしい」と思うときは応じてもらえるとわかってきたなど他者を理解し始めた現れと考えられる。すなわち本症例は自分の世界と養育者の世界を分化して認知し始め、ことばの基盤を形成したのである¹⁸⁾。

なお生後11ヵ月以降本症例には笑うふりが観察されている。これは中島がことばの動作的基盤と呼んだ象徴機能の始まりである。

こうなると、子どもは「ことばと身振りや仕草」の意味を理解するようになり(観察10, 12, 13, 図4)、かつ、「動作と視線と声」を組み合わせた表現(観察9)

を、そしてことばを使い始める(観察13, 図5)。すなわち本症例は対人的循環反応からさまざまな要求表現を、そして最終的には「ことば」を派生させたと考えられた。

なお本児はひとたびことばを発見すると、対人的循環反応において相手からの声やことばを引き出し、その機能をも試すにいたり(観察14, 図6)対人的循環反応は本症例の聴覚活用に重要な役割を果たしたと考えられた。

以上のように乳児期にその気持ちを察しつつあやされた本症例の言語獲得は、ラベリングとして物の名前を反復して話しかけられる、ことばにさらされるという受動的な状況ではなく、対人的循環反応や参照視を基に、能動的に他者との関係をつくり、他者を理解し、言語を発見する過程であった。

Dunham²⁰⁾は、親子の間に共同注意が成立するには、乳児がガラガラなどに手を伸ばしたとき、子どもがそれを振るように手助けをすることが重要としている。

本研究によってこのDunhamの見解には、ガラガラを手にした乳児に向けられる親の注意を乳児自身が発見し、興味を示し、親の注意を引きつけようと子どもが強い自発性を示すことがあるということが追加されなければならないと考えられた。

ま と め

1. 0歳難聴児1例の観察で、症例がよくあやされ、生後半年を過ぎる頃、対人的循環反応によりことばの基盤の形成が始まり、1歳頃で初期のことばの発見(自発的な言語獲得)にいたった経過が観察事実として示された。

2. 症例は対人的循環反応において、積み木を倒す(中島の動作的認知)などの行為で養育者との関係をつくり、同時に参照視で養育者の反応を見て、その情動を読み取り、自分の気持ちとの関係がわかるようになった(中島の情動的認知)。その結果、そこから養育者との気持ちの共有、「待つ」という要求方法、視線・動作・声を使った伝達方法を生み出し、やがてことばの発見・獲得にいたった。

3. 本症例における自発的な言語獲得や他者理解の本質は子どもが養育者との関係に興味をもち自発的にその関係をつくる点にあった。それは出生後よくあやされ、対人的循環反応のなかで実現された。

4. 乳児期によくあやされた本症例の言語獲得は、反復して話しかけられ、ことばにさらされるという受動的な過程ではなかった。

附記 本稿要旨の一部は、「心の臨床」特集号³⁾と、コミュニケーション障害学シンポジウム特集⁴⁾で報告した。

文 献

- 1) 野中信之, 馬場朱美, 西岡奈美恵, 他: 人工内耳によって発達する聴覚性情動的認知. 音声言語医学, 44: 15-22, 2003.
- 2) 野中信之, 越智啓子, 大森千代美, 他: 情動的認知発達が遅れた重度難聴児—遊びの発達と言語獲得の特徴, 療育の要点—. 音声言語医学, 45: 106-114, 2004.
- 3) 野中信之, 大森千代美, 越智啓子: 難聴乳幼児のこころとことばの発達の援助, 特集手話の「あいうえお」, 心の臨床, 24: 69-73, 2005.
- 4) 野中信之: 難聴児の関わりから学んだこと, シンポジウム特集II子どものセラピー, コミュニケーション障害学, 23: 64-68, 2006.
- 5) 野中信之, 大森千代美, 越智啓子, 他: 小児人工内耳症例の言語発達 補聴器装用児との比較. Audiology Japan, 49: 244-253, 2006.
- 6) 野中信之: “言語・心理・精神発達の検査” (特集 乳幼児健診のキホンを確認! 子どもの成長・発達と検査の知識検査内容を確認しよう・3歳児健診を例に). 保健師ジャーナル, 60: 448-449, 2004.
- 7) 野中信之, 越智啓子, 大森千代美, 他: 情動的認知の発達が遅れた難聴児—療育初期の実態と療育終了後の経過—. 音声言語医学, 44: 264-273, 2003.
- 8) 別府 哲: 自閉症と広汎性発達障害. ことばの発達と障害 2 ことばの障害入門, 大修館書店, 東京, 31-52 頁, 2001.
- 9) Emde R and Sorce J: 乳幼児からの報酬: 情緒応答性と母親参照機能. 乳幼児精神医学 (小此木啓吾監訳), 岩崎学術出版, 東京, 25-48 頁, 1988.
- 10) 金山千代子, 南村洋子, 木村泰江, 他: 難聴児の幸せのために (『母と子の教室』親の会編), ぶどう社, 東京, 1989.
- 11) Musselman R, Wilson K and Lindsay H: Effects of early intervention on hearing impaired children. *Exceptional Children*, 55: 222-228, 1988.
- 12) Yoshinaga-Itano C and Brown AS: Learning to communicate: Babies with hearing impairments make their needs known. *The Volta Review*, 95: 107-129, 1992.
- 13) MacTurk R, MeadowOrlans K, Koester L, et al: Social support, motivation, language, and interaction —A longitudinal study of mothers and deaf infants—. *AAD*, 138: 19-25, 1993.
- 14) Brown AS and Yoshinaga-Itano C: F.A.M.I.L.Y. assessment a multidisciplinary evaluation tool. *Infants and Toddlers with Hearing Loss: Family-Centered Assessment and Intervention* (edited by Roush J and Matkin ND), York Press, Baltimore, pp 133-161, 1994.
- 15) 中村公枝: 聴覚障害児の早期療育. 音声言語医学, 45: 217-223, 2004.
- 16) Bruner J: 共同注意から心の出会いへ. ジョイント・アテンション 心の起源とその発達を探る (大神英裕監訳), ナカニシヤ出版, 京都, 1-14 頁, 1999.
- 17) やまだようこ: ことばの前のことば, 新曜社, 東京, 1988.
- 18) 中島 誠: 言語行動. 現代基礎心理学 10 発達II 個体発生 (鹿取廣人編), 東京大学出版会, 東京, 137-166 頁, 1984.
- 19) 中島 誠: 子どもが育てることばと知能, アカデミア出版会, 京都, 1997.
- 20) Dunham R and Dunham F: 社会的やりとりの最適な構造と乳児の適応的な発達. ジョイントアテンション 心の起源とその発達を探る (大神英裕監訳), ナカニシヤ出版, 京都, 145-178 頁, 1999.

別刷請求先: 〒799-0422 愛媛県四国中央市中之庄町
1684 番 10
四国中央医療福祉総合学院
野中信之